スポーツの歴史と文化（5）「球技」その2

天理参考館学芸員
幡鎌　真理　*Mari Hatakama*

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が閉幕した。2大会連続金メダリストとなった大野将平選手をはじめとして、本学関係者の活躍が目を引く大会となった。始まるまでは開催を危惧する声も多かったが、いざスタートすると、選手たちの健闘は見る人の心を揺さぶった。スポーツを見て感じるこの胸の高まりは、いつの時代に生きる人間でも同じだろう。

白陶加彩舞楽女子　唐（天理参考館蔵）
中央の舞姫の両脇に、竪琴や琵琶などの楽器を演奏する女性が並ぶ。これは7世紀唐代の俑だが、遡ること1000年の斉でも同様の光景が見られたのだろうか。

さて、球技の魅力に迫る2回目である。前回でも少し触れたように、広い意味でフットボールと呼ばれる球技の最も古い記録は、かの有名な司馬遷の『史記』の蘇秦列伝に残されている。紀元前300年中国の春秋戦国時代に、斉の国は“臨淄甚富市実、其民無不吹竽、鼓瑟、弾琴、擊筑、鬬鶏、走狗、六博蹋鞠”であったと記す。すなわち、“斉の国は富み栄えて、都の臨淄では人々が竽（笙より大型の管楽器）を吹き、瑟（箏に似た弦楽器）を鼓し、琴を弾き、筑（弦楽器）を擊ち、鶏を鬬わせ、狗を走らせ、双六を楽しみ、蹴鞠をしない者はいなかった”と伝えている。この例を引いて、蹴鞠が軍事訓練の一つとして行われていたと評する向きもあるが、優雅な遊びの事例と併記されていることから、蹴鞠も風流な遊楽の一つであったと思われる。同じく張儀列伝でも“天下彊國無過斉者、大臣父兄、殷余富楽”、“天下の強国で斉に勝るものはなく、大臣も王族も富裕安楽を極めている”と記録されている。戦々恐々と軍事訓練に明け暮れた様子は窺えない。おそらく、蹴鞠は楽器を奏でるのと同等の典雅な趣味だった。斉の臨淄は経済や文化が繁栄した都市だったのである。この記述に拠り、2004年に国際サッカー連盟FIFAは中国の臨淄をサッカー発祥の地と認定した。

その後豊かな斉は秦の始皇帝の圧倒的な軍事力に滅ぼされるが、その秦は短命に終わり、漢が再び中国を再統一した後に三国時代を迎えた。映画「レッドクリフ」の舞台となった激動の群雄割拠の時代である。この映画の冒頭、圧巻の戦闘シーンのような蹴鞠の描写が印象深い。それはもはや「スポーツ」ではなく、まして「優雅な遊び」でもない。2チームに分かれた10名ほどの選手たちは足だけで激しく球を奪い合い、左右の板囲いに開けられた球門にゴールしようと競り合う。ゴールさせまいとする追撃や防御はすさまじく、あたかも格闘技の様相を呈する。その字幕は「蹴鞠」である。球は白く、おそらく革製と思われるが、弾みは少なく、詰め球であろう。そこにいた選手の一人、孫叔材は活躍を賞され、曹操に千人部隊の隊長に抜擢されるところからこの映画のストーリーは展開していく。別に記するが、蹴鞠はその後も、日本でも出世のチャンスの場であり、天皇の前で妙技を披露すれば翌日には東宮の蹴鞠師範に登用されるということが現実にあった。もちろん貴族階級には限られるが。蹴鞠を端緒に歴史の表舞台に登場した藤原氏とはいえ、摂政関白の血筋ではない貴族からすれば、それは重要な、数少ない機会であった。有名な歌人の藤原定家は当初大の蹴鞠嫌いであったが、息子の為家が後鳥羽上皇に蹴鞠の技を認められて院の近臣として重用されるようになると、本当に手のひら返しで蹴鞠を容認するのである。

白陶加彩騎馬女子　唐（天理参考館蔵）
ポロを楽しむ女性の姿

話を中国に戻すと、その後の唐の時代まで、蹴鞠は鞠を争奪してゴールに入れて得点する男性のチーム競技だった。先程の曹操は現実でも蹴鞠を重視し、戦争中も弓馬と蹴鞠を奨励したと記されている。“将は弓馬の道に務め、兵は蹴鞠を学んだ”とあるので、蹴鞠は歩兵の軍事教練の位置づけだった。7世紀の唐では一転してポロのような打毬の様式が流行し、女性が楽しむようになった。400年ぶりに中国に統一国家をもたらした隋、さらにそれに続く唐は中央集権体制が確立されて安定した世の中になったということだろう。その後の宋代には、蹴鞠は数人で鞠を蹴り合う体裁になり、軍事訓練というよりも、上流階級の遊びにかたちを戻した。1300年の時を経て斉の風雅に回帰したか、あるいは激しいチーム競技の球技と、二系統でそれぞれ発展したのかもしれない。遣隋使や遣唐使を通して詳細に、そのずっと前からも「蹴鞠」なるものは中国から日本に伝来していただろう。日本はそのとき何に主眼を置いたか。私たちの先祖は優雅な遊びを選択したのである。それはなぜか。天皇や貴族が興味を示し、やってみたいと思ったからにちがいない。これは訓練として防人にやらせようとは考えず、法興寺で楽しみましょうよとなった。貴族が嗜（たしな）むのに激しさは必要ない。ボールは詰め球ではなく膨らませ球で、万一顔面に当たったとしても笑ってやり過ごせる柔らかい鞣（なめ）し革を採用した。中国から東南アジアにも同様に蹴鞠は伝播しているが、そのボールは籐製の編み球で、それぞれの地域の風土に合致している。

宋太祖蹴鞠図　室町時代（天理図書館蔵）
宋の太祖と弟の太宗、重臣たちが鞠を蹴り上げている。

私も今回の東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会で大野選手の応援に力が入ったが、国民性が露わになるのは、敗退した自国チームへの対応だろう。2014年のサッカーワールドカップ大会では、スペインやイタリアのチームが祖国の地を踏んだ時、出迎えのサポーターはまばら、韓国ではチームに飴玉を投げつけたファンもいたという。ブラジルが決勝でドイツに大敗した後、国民は怒り、バスを燃やした。日本では空港に出迎えたサポーターが選手団に「よくやった。お疲れ様～」と声をかけた。日本人は古代ローマ人同様に、「deportare」＝「遊ぶ、楽しむ」という意味で蹴鞠（サッカー）をはじめスポーツを柔軟にとらえているのかもしれない。